

入院第8 日目 ナース をからかうな

この季節は、どこの病院でも看護学校を出たばかりの新米ナースがたくさんいる。それをからかって遊んでいる悪質な患者がいるもので、じつにもってけしからん次第である。

5

新人の大家ナースが夕方やってきて、何かと不調で、ピーピーとなる「輸液セット」を新しいバージョンのと取り替えた。

「輸液セット」なるものは、微量の点滴を長時間かけて滴下させるためのフィードバック機能を持った精密器械だ。だからかなり重い。大家ナースはそもそも手順が悪い。不調の「セット」を取り外したまま、コンセントを抜くの忘れ、うろたえている。ぼくの左手は点滴の針が入っているので、ナースは尋ねた。

「島岡さん、右手空いています？」

「見れば分かるだろう？右手はふさがっている。頭の下に入れて手枕に使っている」

「んもぉー。いいですよ」

と言って大家ナースは「セット」を床に置こうとするので、さすがに情を催したぼくは、

「あ、わかったわかった。このコンセントを抜けばいいんだろう？たく、この病院は患者をこき使うんだから」

と余計な言葉を付け加えたら、大家ナースは本当に焦っていた。気の毒なことをした。

大家ナースは、今度はなにやら電卓をたたいたり、指を折って数えたりして、長時間、点滴容器（それはビニール袋でできているからかなり不定形）に細かく細かく目盛をサインペンで書き込んでいる。

「なにやってんの？」

「ヘパリンが30分ごとに減って行く量を計算して、目盛っているんです。」

ぼくが驚いた。

「えーっ？そんな複雑な計算をしてんの？」

ええ、だから大変なんです

「そりゃ大変だ。で、何のためにしてんの？」

「今夜の夜勤のナースの後山さんが見てすぐ分かる目安です」

「だって、この容器は複雑な形をしてるんだよ。ここんところかくびれているし」

「ええ、だから目安です。」

「おかしいな、ことごとこの間隔が違うじゃないか」

「ほんの目安なんです」

「だっておかしいよ。ここんところはだんだん

容器が細くなっているのに、目盛はその上とおんなじだよ？」

「しつっこいなあ。だから目安に過ぎない！」

「ばっかだなあ。そんな不正確な目安が何の役にたつの？長い時間かけて、電卓をたたいて、指まで折って……」

「わたし算数が苦手なんです。悪い？」

「ここのナースはよほど暇なんだなあ」

「ヒマじゃありません。この計算のお陰で、勤務時間が1時間半もオーバーしているんだから」

「……無言……」

「参考のために、島岡さんにうかがいますが」

「……（かなり怖い）……」

「入院生活ってひまですか？」

「いいいいえ、大家さんのお陰で充実しています。そこへ夜勤の後山ナースが交替の引継ぎができず、たまらずやってきたのだろう。」

「何かもめているんですか？」

大家ナースは八つ当たり気味に、「夜勤のナースが美人で今夜は充実するでしょうね。フン」と言って去って行った。

どうやら大家ナースにととても嫌われたらしい。

